

一九五一年

千曲會報

第四三三號

専門學校閉校式舉行さる

新制大学へ完全移行

母校上田繊維専門學校は今回の学制改革の結果発展解消を遂げることとなつたがその閉校式は別項の如く去る三月十日日本学講堂に於て舉行された。

本号はこの発展の閉校を記念するため特に伊藤学部長、井上前校長両先生の玉稿を頂き、又閉校を機に御退職になつた大滝、原田、古谷、小林、桶田諸先生の思い出を掲げる事とした。

轉換期寸描

繊維学部長 伊藤 武男

昭和二十六年三月十日一七五名の卒業生を送つたのを最後に上田繊維専門學校はその四十有余年の歴史を閉じて信州大学繊維学部に移行したのである。今日新緑の校庭に立つて既往を回顧すれば多少の感懷なきを得ない。惟それは明治四十三年上田泰糸専門學校が創立されて以来先人の孜孜として操業經營のお蔭で年と共に発展し、その間本科卒業生三七〇名その他五八四名計二八五四名の繊維技術者を世に送つて我國繊維産業界に致した功績は洵に偉なりと云わなければならない。

また針塚先生以降、我が學園に培われきた傳統——積極的な実践精神、強い責任感旺盛な研究心は何ものにもまして貴いものと思はれる。今次の敗戦で、今から思えば沐猴の冠するにも似たあの朝野の思ひが一朝にしてけし飛んでしまつたのはまことによかつたがそれこそ我々民族の自尊心まで満たしたのではないかと憂えらるるまで我國の道義が大揺れに揺すぶられた大あらしを経て来た今日春間に小書を送るに涙する如きは閑老にわれ等も共感を覚えるのであるが、そのあらしの後の我が學園は如何であらうか。

一昨年九月竣工した新本館は本

昭和二十六年六月廿五日印刷
信州大学繊維学部内
編集 田口 亮平
印刷 中 沢 正
印刷 中沢印刷株式会社
印刷 信大繊維学部内
発行所 社團法人千曲會

投稿歓迎

前号に於てもお願い致しましたが本會報の使命を活かすために皆様方の御投稿を歓迎致します。特に各支部の近況をおしらせ願ひます。



針塚先生像

てその協力を求めたのである。これは土を掘り石を運ぶ仲々の重労働であるが、所謂アルパイトではなくて、報いられる所は精神的なもの、外は極めて少く、僅に空腹を充たすおにぎり位のものである。それにも拘らず學業の閑な時間には十数人乃至数十名の學生が黙々と庭造りにいそしむのである。これは全く自発的な奉仕であつて我が傳統の自然の発露といわなければ

學部に新に一偉容を加えることになつたが、建物が裸出せるまゝに之に落付きと氣品を添ふる目的でその周りに植樹を計画した。それは新本館玄関前にロータリーを造るのを主眼とするものであつたが計画を進めるほどに仕事が大掛りとなり到底小人数の傭人の手におえなくなつたので學生に懇え

ならない。

この純粋な協同精神は深い叡智と共にこの學園の自由闊達な民主精神の裏付けとなるであらう。

その叡智を養うために新制大学は一般教育を重視する。即ち、人文科学、社会科学及自然科学の各分野にわたる広い視野を持つてもその価値を正しく判断する人間

信州大学繊維学部は我國の繊維の學府として繊維の研究及教授の最高峰を行くものでなければならぬ。我國に於ける繊維工業は我國重要工業の二環として我が國家經濟を支持發展させ我國再建の上に重要な役割を演ずるものであるから、我國の繊維工業の發展には極力努力しなければならないのである。この意味に於て我々繊維学部の研究及教授は極めて重要性を持つて居るのである。

即ち大學教育に於ては研究は極めて重要なものである。大學は単なる既成知識の教授に終始する學校ではないのであつて、研究と教授とが一体化して居なければならないのである。教授自ら學問の研究を通じて學生に學問的情熱を喚起し學生を指導、教養して行かなければならぬのである。かゝる点から自ら研究するものにして初めて生きた教授をなす事

繊維の研究に就いての所感

井上 柳 梧

が出来たのであつて研究なくしては眞の大學教授とはいへないものである。大學教育に關しては研究はかくも必要なものである。

然らば繊維に就いてはその研究は如何と考へて見よに養蚕、製糸、絹糸に就きては其の研究は實に多い。恐らくは世界何れの國に於いても是等の研究に就ては我が國に優れるものはないと思ふ。先ず桑についても其原種、品種、栽培、土壌、肥料、化学的組成、生理、病理、桑葉の熟度、硬軟、摘葉、電害、桑皮の利用、桑の代用植物等非常に多いのである。蚕種に於いてもその化学的組成、冷蔵、人工孵化、生理、呼吸、刺激等があり要に於いても形態、生長生理、化学的組成の生長に伴うその変化、遺傳、蚕病、雌雄鑑別、絹糸腺等につき多数の研究がある。更に蛹につきは蛹の生理、化学的組成、蛹油及び其の利用、蛹蛋白質

頭微鏡室が昨年竣工し、已に電子廻折装置の設置を見たが、更に近く大型電子顕微鏡や超ミクロトーム等が揃えば超微視分野の研究がやがて活発となるであらう。又今年度は鉄筋コンクリート建二〇坪の電電室の新設が内定している程度で、現在の我が國の財政状態では急速な設備は望めない。漸を追つて充実を計つていくより他なからう。

重要なことは學園が「如何にあるか」といふことよりも「如何に動いてゐるか」である。それは結局人の問題に帰着するが幸に研究の氣運は——特に若い教員層に鬱勃たるものがあるから先が樂しみである。更に基本的な重要なことは學園が成長しつつあるか否かである。周知の如く晩近の纖維科学の躍進ぶりは美に目覚しいものがある。我が繊維学部の進進に沿つて成長すべきは言を俟たない所である。

等に関し更に觸及び生糸につきては乾繭、選繭、貯繭、冷蔵、飼養、繰糸、繰糸機械、繭解舒等各方面に向つて非常に多い。生糸については實験、試験機、別種法諸幾多の研究が次々次々に重ねられて居る。なお生糸貿易、發賣、政策の方面にも研究が多く、最著を觀察すれば蚕糸業だけでも偉大なる研究の数はある。更に纖維として現下衆目の的となつて居るものは、彼の合成纖維である。ナイロン、オートロン、パールロン、ビニロン、カネビヤン等相次いで新しい合成纖維が現出して来る。更に又無水マレイン酸、無水琥珀酸、ポリアクリルニトリルの重合体がら出来てゐるものがある。紡糸も容易で、特異の性能を持つて居ると云われて居る。前々化学的及び物理的助作用に対し非常に強い抵抗力を持ち染色性も非常によいといわれて居

大瀧照太

開校以來永くお勤めになつた先生の存在は特異なものであつただけに今先生が數筆を去つてしまわれると大變に淋しさを感ずる。私が母校に参りました時は、先生は平度數系科長をしておられたが先生の研究室が遠く動物室の方にある爲、我々科風との接觸が少なかつた上に先生の性格として科内の細いことには余り干渉しなかつたので若い者の氣持は本當に伸びびくとしていた。而し先生は遠くから注簾深く眺めて腸線させぬ爲

大瀧照太郎先生

窪田潤

の用意は怠らなかった。実際先生には科員は勿論のこと校内外の人々の細かな行動をよく知つておられた。それ故特に注意を要けることは無いがと云なく忍びの所があつた。兎に角先生の態度は親分的であつたがその反面極めて神祕的な處がないでもなかつた。先生の行動は常に学校の急に由裏であつた。例へば職責を減らさなければならぬ云々は自分の科に退職者が出ても補充することなく不便を忍んで態を示すのである。なお又公私の

新人生が寄宿舎に入ると上級生は得意になつて諸先輩の噂話をするのが例である。大瀧先生に就ても沢山に聞かせるが、その印象はなんとなく驚愕という感がある。思に有、大瀧先生の尊厳はうんと動揺せぬと矢度としく付け落さされるからと感されるから皆よく勉強するのだが不慮に先生の試験には當参つてしまふ。實際先生の欠点の一つ方は癖であり、然るに三月の及第筆記試験には何日も大いに力を盡かしたものである。そして本年最後の採点迄これは続いた。

先生の癖といへば第二に刀剣次に開巻、各所自願の行開等と思ふ。この外にまだあるかも知れないが私は知らない。刀剣の鑑識はあまりにも得意であり、今でも沢山の刀を蔵されていること思うが終戦前は先生の感化を受け刀剣に興味をもたれた方が少なくなかつた。私も切れ味申分なく言ふのを一振舞いで戦地に出征けた一人だ。錆びた刀があれば磨き形の削れたのがあれば研ぎ直す等先生の癖は是に入つたものだと聞いている。昔も大變に強く家に客あればよく磨きを賜ふるとか。先生は是に際してよく金剛石磨を動かせることが大変好きの様であられた。そして奥に磨く色々知つておられたには驚かされた。

先生は酒を二瓶も口にされぬやうであつた。そして刀鎧席も大嫌

原田親雄先生

山口定次郎

いのまゝであつた。然し個人的人にはよく揉まれ、よく世話をされたが不愉快に一般には寄りつてきにくい人のように思はれてゐた。遊びに行つて見れば大變に親しみ深い人なつてゐるやうであるのだから、これも先生の行動が常に理想に添つており、金銭に誘ひでありかつ原因していると思ふが、然し話して見れば本當によく分つてゐる先生だつたと思ふ。

先生は昔より顔は鼻体が弱かつた。爲かす欠點され私達はその度に休講を喜んだが晩年の先生は大變に丈夫になられ強々又休まれたこととがなかつた様だ。然し気分は大變弱られていたまだが生業の性格は相変らずであつた。

先生は専門学校の開校と共に幾に引退されたが吾々の眼底には何時もまたあの和服で元氣をやつて来られた姿が残つて消えないであらう。先生の御多幸を祈つて掲載する。

力学が樹立された頃で先生の頭は
ひとでなく深く準ひておられ生徒
の能力には随分はあてがふ恵られた
ことと拝察されて申訳がない。

次で昭和二年には物理及化学學
研究の爲海外留學を命ぜられ、三
月出發昭和四年七月歸朝されたが
その間独逸を主とし伯林大學氣學
研究所に於て懸命に研究され又獨
國、米國を各一月間視察され、
愈々その造詣を究められた。

物理學の岡田先生は母校の教授並に講師として三十九年の永年の勤務を終えられ今年四月からは大學の講師として非常勤をされることになった。ついで先生について何か思い出を尋くようにと編集子からの命をうけ何か誌されねばならなくなつたがさて學者として又人間として底知れず深奥い先生を述べることは不可能に近い大仕事であるので与えられた紙面の範圍で先生の略歴とその一面を記すことにする。

先生は明治十九年苗田市に生れ今も本郷は苗田にあるが、その頃北海の風雲甚だ盛であつたので土族の家柄であつた御一家は北海道に移住され國防の重任を務められた。従つて先生は根室郡の某村の小學校を終え又当地の中学校で嚴格な教育と訓練を授けられた。然しながら實業の志やみ難く明治三十七年、當時としては余り遅通

はる東京に出られ、苦學を覚悟して、東京物理學校に学び又東大理科大學で有名な長岡半太郎教授の物理學教室に在つて専ら物理學を研究された。おそらく新しい物理學「量子論」の研究が始まつた頃であつた。後東京で一二の中学校に數科をとり、又東京外国語學校の獨逸科を專修される等大姿な勉強をされた。かくて母校創設の翌年四十五年には上田實業專門學校の講師として赴任され築地實業教授の教室に入られて以来上田での御生活、學校での御研鑽が始められたわけである。進んで大正七年には教授に任せられ物理學、數學及び氣象學、獨逸語等中広く多くの講義を担当せられた。私達もその教えをうけた一人であるが実は物理學は大多數の者には早稲で先生は五〇京を加えて二で割つておつた及第させて下さつたのだな

は格別な努力を要した。
更に終戦の翌年には横濱に空を
開くのを免れて永年の教授の地
位を離れ、引退されたのであるが先
生の遺言は非難に憎まれ続いて議
師を貶せられ今日に及んだので
ある。

以上が先生の略歴と申すべきで
あるが先生は今日迄斯く多忙な議
義や実験に追われながらも傍ら骨
に科学の第一線にある新物理學を
絶えず把握し、之を教授する為に
はその軽食も健康も忘れて御勤
強を續けられていた姿には全く敬
服の他はない。誠に学問探究は先
生にとつて――否科学者は凡そそ
うでなくてはならないが――毎日
の食物よりも大切であるという感
じをうけるのである尚先生は物理
學者の常として哲學者の御禮體も極
めて深く之を忘れることが出来
ない。

(以下四頁五段)(一)

母 校 便 り

繊維學會母校に開催さる

繊維學會昭和廿六年通算總會並に総會演説會が五月十八、十九の二日間山口、林、奥、金田先生方始め各内會の努力により開かれ、前会長岡田隆太郎氏、会長内田孝作氏、副会長相澤文雄氏等を始め繊維界の權威多數の出席を得盛會を博した。十八日は總會及び研究発表會が行われ、五四種中内からは十四種の発表があり大いに活躍した。同夜行われた長野縣繊維産業振興會は繊維關係業者を加へて盛大であつた。翌十九日は次の如く總會演説會が開かれ、午後鐘紡丸十場、富岡製糸上田工場の見學會を以て終了した。米園に於ける試験検査機關の概要について

理事長 佐田賢氏
2、アメリカに於ける化学纖維について

東郷レオン株式會社
取締役 高木竹男氏
3、生糸の體裁關係について
片倉工業株式會社
取締役 中島寛信氏

尚同會が地方に於て行われたのは今回が初めてであるが、その第一回が上田に於て行われた事は母校の發展を示すものであり誠に喜ばしいものであつた。

佐藤利一博士に

蚕絲功績賞

養蚕學科佐藤利一博士は多年養蚕關係者の教育並びに微生物

養蚕體裁の學術研究を通じて養蚕の發展に著した功績に因つて昭和廿六年養蚕會より養蚕功績賞を授けられた。

先生の受賞は其の御業績から当然と云へ、先生御個人にとつては勿論、母校の名譽でもあつて衷心喜び申上げる次第である。

蒲生俊興博士に

蚕糸學賞

蒲生博士は此度「家蚕の養蚕生理に關する研究」によつて日本

専門學校最後の卒業式

並に閉校式舉行さる

専門學校として最後の卒業式は三月十日林縣知事榎田學長代理臨席のもと本校禮堂に於て舉行せられた。終つて上田繊維専門學校の閉校式が行われ多年勤勞者の表彰があつた。

因みに今回の新卒業生は繊維農藝科三名、養蚕科五名、製糸科三名、紡績科四名、纖維化學科五名であつた。

閉校式に於て多年勤勞者として表彰された方々は次の通りである。(カソコは勤勞年數)
大館照太郎(三) 小林清丸(三)
原田雅雄(三) 佐藤利一(三) 宮下南(三) 内藤栄吉(三) 須田圭二(三) 佐藤春太郎(三) 古谷榮

養蚕の養蚕學賞を授けられ、五月六、七の両日京都・養蚕維大養蚕學部に開かれた第二回日本養蚕會に於て晴れの表彰を受けた。佐藤博士の功績賞と共に御同席の幸に存じ、懇々同博士の御演説を御禮申し上げる次第である。

井上前校長

長野短期大學長に就任
この四月上田市長の任期満了となつた井上前校長は縣から縣望されて永らく公職中であつた長野短期大學(旧長野女學)の學長に就任され、再び教育界に歸られた先生の御清静を期待すると共に御健康を祈るものである。

蚕絲功績賞

受賞に就て

佐藤 利一

不肖は國に於ても去る五月四日大日本養蚕會總裁員大府閣下から養蚕功績賞を授けられた光榮に浴しました。全國で六名の功績受賞者の末席に列し得ましたことは洵に身に榮光であると思存しますが、過去の業績を顧みて甚だ愧怍たるものがあります。既往四十年に亘るとする私の職歴の経歴は私の活動期は殆ど全部でありますが、徒らに勞多くして功少く所謂人生五十功なきを愧つた感が愈々深いのであります。其間大戦敗戦、大學昇格運動等重大事件が發生し、側席教授として或は校長を補佐し、或は自らも陣頭指揮を揮ふ機会も少なくなつたが、只誠心誠意だけでは物にならず非力のため事と違つたこともありましたが、然し迄に角今日を迎え此恩賞に与るを得たことは偏に校内外各位の御交授と御厚庇の賜物であると感謝して居ります。

入学式行わる

昭和二十六年新入生の入学式は四月十日午前八時より榎田學長臨席のもとに行われた。

學長は偉大學生としての理想と矜持をもつて四年間の學生生活を送るにあつたものと、最後を述べられ學部部長は學部と學科を基調として之を貫くことを以てせよと勉勵の言葉を示され、新入生によつて感激の入学式を終つた。本年の入学者は養蚕科三〇名

製糸科三〇名、紡績科三〇名、纖維化學科五名、合計三〇〇名であつた(養蚕科、化學科各一名)は女子學生であつた。

(一)東より
尚生の御禮は有名で昔々も卒業後校内有志で教をうけたことがある。留學中も幾々外國の學校で依頼されて流暢な独語で講話をされ日本に紹介されたといふことである。又嘗て相對性原理で有名なアインシュタインが日本に來られ東京で講演された折も右原博士の講義によるよりもア氏の直譯の講演の方がはるかに早く判つた等と云はれた。相對性原理のことをいへば先生は東京でその講演を聴いてから學校に歸り談話全盛で一日間に三つて之を解説されたことがあるが夜にかゝつても続けられ、黄色いローソクの光に照らした顔を照されながら熱弁を振られた時などは実に尊く美しい情景であつたと今でも忘れえぬ印象である。先生が「談話會」の創始者であることは、別に「澤田」にも記したが之は當時としては校内外の科學研究會であつた「自分は専門の方面はわからないが唯その愛國心が好きだから」といつて二十年間近く出席され指導された。若い生徒はもとより心ある先生方も何時しかこの會に引入れられた程の魅力をもつていた。最後に先生の御家族については先年丸堀から原町へ御遷居になり昨年十月は平常余り御健康に振るなかつた奥様が、遂に御他界になつてから松尾高枝先生の末子(三男)の方と再入となつたが之が亦今年四月上京され今は全く唯一人のわびしい御生活となられたのである。即御子孫は、三十六才の長

職員人事

田口平教授 新たに附屬農場長を兼ねられることになつた。

倉沢美徳助教授 五月四日附を以て新設の養蚕科科長となれる榎田文次助教授 別冊記載の如き御事情で辭職され郷里の福山市に帰られた。

墨谷茂隆講師 昭和二年東大第一工學部応用化學科卒、信州大學講師として纖維化學科所屬清水周次教授を指導し、昭和十六年當校纖維化學科卒、実験室指導員として化學科農研室勤務

男親貞氏(現在文部省教務院勤務)を始め二男五女計八人の子宝に恵まれ中六人は夫々既に家庭を結ばれている。

又八人中六人は東京に在られるので先生の身辺を案じて「御父上も上京されるように」と切にすすめられるのであるが、先生ははるく上田でその身を養ひ、やがては親戚の方から通うようにして御子孫達を安心させる御予定のようである。

以上先生の姿のほんの片鱗を記したにすぎないが、要するに先生は極めて實業な生き方を好み、常にその身を養ひ、つゝ思想を練り人間完成に努力され、そして學問の精進、學生の訓育、家庭にあつては慈愛をもつて子女の教育に當る等人知れず余心全意を傾けて來られたのであるが、其の御はその格に接し、思想や先生の生活に遠く触れて見なければわからないと思ふ。(五、二二)

更に西沢研究室へは五回松崎君のかわりに東大農学森研究室の副手をしておられた佐久の小林君が入りスマートな容姿は娘の魅力ノ

萬木 雲造 大塚 直人
 赤羽 義雄 依田魔之助
 永井 干治 中條 興夫
 阿部 文夫 石田 三雄
 足立 隆雄 池田 俊郎
 三輪 廣徳 塚田 信一
 山本 潤造 田島 政三
 長尾 泰次 津島 利雄
 轟田 猪一郎 柳沢 正佳
 墨子 浩 塩 瑞
 富田 陽一郎 百瀬 久
 江間 正夫 大橋 正夫
 田中 一行
 田中 茂光 田中 久雄
 上原 淑助 押金 健吾
 中康 武 青田 和
 青沼 茂

決清報告は次号に掲載いたします。
 (係)

弔慰金報告
 故小林茂樹殿弔慰金
 金百圓也 大倉 政平
 馬場 長市
 石谷計金弔慰金
 故佐野忠一郎殿弔慰金
 金百圓也 馬場 長市
 故柳田福雄殿弔慰金
 金百圓也 伊藤 文男
 故和田仙太郎殿弔慰金
 金五百圓也 石原清洲夫
 金百圓也 小口 英一
 金參百圓也 渡辺 濟
 中沢 忠
 金貳百圓也 富蔵 博
 高越 繁夫 高木 三治
 大倉 政平
 雨宮 金雄 安岡 美登
 倉沢 美徳 林 直三
 山崎 幹録 野口新太郎
 等原 正巳
 金百五拾圓也 山口定次郎
 篠田 潤 荻原 清治

五月二十日現在

[illegible]

狹原孝夫(化九) 丁藤敬男(化九)
 中山健貞(幼三) 平村廣二(三)
 昭和二十七年年度會費
 金貳百圓
 今村治(系三) 狹原孝夫(化九)
 昭和二十八年年度會費
 狹原孝夫(化九)
 準會費納入者
 金百拾圓也 鈴木 孝二(數二六)
 金百五十也 今井はる子(數二七)
 金百圓也 南波 トリ伯 數
 西暦(數二六) 間島龍一(一七)
 金八拾圓也 竹下 忠雄(數六)
 齋原行子(數九) 河上ひさ子(二)
 平林こう(二二) 吉田夏大(一九)
 金六十五也 中村輝子(數二七)
 金六十也 松浦ひさ子(數二七)
 齋原たふ美(數二)
 金四拾圓也 依田隆江(數二七)
 林ハル子(數一七)
 金參拾四圓也 松田孝子(數五)
 會費補充
 寄附金納入者
 金四百六拾圓也 林秀人(系一九)
 金貳百四拾圓也 矢沢健登(一)
 金貳百參拾圓也 上林多兵衛(系九)
 竹内虎夫(系九) 小松茂久(系九)
 北沢潤一(〇〇) 山下忠雄(一五)
 三宅武夫(二〇〇) 岩尾今生(三二)
 平間正夫(三二)
 大藪政平(系二) 山岸松次(三二)
 柳原春彦(八) 若林新一郎(二〇)
 岡本榮一(一五) 武井和夫(二〇)
 中村幸喜(五) 芝村睦夫(二六)
 金貳百貳拾圓也
 福島鋼治郎(系二)
 金貳百圓也 秋山一郎(系四)
 石坂虎治郎(系五) 中澤正(二六)
 竹内 健化(五) 福田昇平(五)
 岡田義弘(二六)
 廣正平(系二) 半田義男(三二)
 田中光雄(二八) 堀沢 尚(系三)
 小山喜三郎(系三) 土屋孝(二五)
 小林良昌(幼一) 伊藤常治(化四)
 金壹百圓也 勝又藤夫(系九)
 雨宮金雄(一七) 山岸政治(三二)
 大久保孝一(二九) 小沢敏治(二六)
 宮谷鉄郎(三三) 金井 保(三四)
 有賀文雄(系一) 高木三治(三三)
 買入誠一(一五) 好上泰通(八)
 坂路壽(二二) 小口英一(二二)
 井上保雄(一五) 西田勇三郎(二六)
 種理文一郎(三三) 志摩賢八郎(三四)
 竹島龍一(二二) 佐藤廣八郎(三四)
 福島虎助(二二) 金井忠義(一七)
 中村登一郎(一九) 小泉正徳(二二)
 中村謙章(二六)
 金參拾圓也
 齋藤菊雄(系一) 岡部彌平(系三)
 未納會費納入者
 金參百貳拾圓也 杉山一雄(系二六)
 金貳百九拾圓也 水野公雄(三三)
 金貳百八拾六圓也 相模実勇(系一九)
 金貳百七拾四圓也 今井武四(系一九)
 金貳百五拾八圓也 若林為夫(一八)
 金貳百五拾八圓也 保田康夫(二〇)
 金貳百四拾四圓也 横間敏雄(二〇)
 野本信次(系二二)
 小畑 稔(系三)
 金貳百參拾圓也 荒木勝男(系一七)
 尾上忠雄(〇〇) 高沢英三(三三)
 武本太治郎(三三) 林文彦(幼五)
 池田通二(系二五) 中山泉(系二二)
 金貳拾圓也 富原秀人(系一九)
 中島 夫(三二) 武井通三(系五)
 若井寒助(三三) 秋山昭夫(化一)
 金壹百八拾圓也
 金壹百七拾圓也 伊藤敏之(系二五)
 金壹百六拾圓也 福島喜康(系二八)
 木曾博雄(幼二二)

〔昭和十六年六月現在〕

金龜百六拾四也
小林盤(一)三三
金龜百五拾九也 稻田美糸(二)
金龜百五拾六也也
萬福正美盤(五)
金龜百五拾四也 小山 郎糸(六)
餘來公人 奎(四) 富下 徹男(廣)
金龜百參拾四也
吉田隆雄(奎)(三)
池田盤(二)奎(一五)
金龜百八口也 大塚浩紉(一七)
金龜百也
稻田平(奎)(一)
米田俊雄(〇) 富崎秋雄(五)
西沢豐光(一七) 西沢良(二)
白木榮七郎(二) 櫻井正雄(三三)
秋山利夫(二) 內藤友三(三五)
田中英一(二) 草津豐次(三三)
山田明(〇) 宇治川喜平(三三)
壽沢久夫(二) 水井 寿(三)
紀田英司(三三)
緒方貞純糸(二) 江山實昭(一八)
圭頭(二) 西山本金之助(四)
土藏廣夫(三五) 船橋寶平(五)
省藤耕平(一五) 瀨川 通(一六)
樫田 実(二) 久保田哲 郎(〇)
小林政雄(二) 改正 猛(二六)
柳沢千代茂(化) 藤田康之(三三)
富入昭(一七) 上原 晃(紹雄)
余八拾參四也 土藏茂次糸(四)
金五拾四也 孫井耕雄(奎)(一)
余四拾式也 清水衛敏(奎)(二一)

松本市役所事務課長（愛媛縣知多郡武豊町）
 松本市旭町松城地方事務所所長兼親長
 上野町地方事務所所長兼親長
 長野縣上田市上地方事務所所長兼親長
 富城縣廳事務課長
 富城縣南宇和郡御莊町（愛媛縣南宇和郡御莊町）
 新田農業高等學校（新田縣新田町）
 桑谷丘南學校
 長野市水上町畜養技術指導所長
 南佐久地方事務所所長兼同郡第八中學勤務
 長野市東部事務所兼畜養試驗勤務（長野市岡田町）
 本校養畜科勤務
 本校養畜科勤務
 三光養畜高岡工場原料製
 肥料部牧場原畜系所內
 群馬縣日高郡妙義町安中農系高等學校妙義分校
 大宮市片倉織維研充所
 三重縣龜山町（原糸織）
 岐阜縣中津川郡津島養畜校加子母分校
 新瀉縣上根農畜高等學校（古志郡宮岡町）
 昭榮製紙下服紡工場勤務
 日本レコード長野縣小縣郡東塩田村出產所
 濱坂務農（新潟市南区大岡町寺下 岡田純方）
 伊藤西藥店（橫濱市桜木町四ノ二五）
 死亡
 以外機械株式會社常務取締役（東京都港区芝田村町一之二一 日産館五階）
 （住）
 豐川高等學校（豐川市豐川町東區九十九ノ九 塚田方）
 神戶市東灘區本山町岡本室藏十三
 杉並區井荻ノ五十六
 自營（松本市堀橋一、五八二）
 東京都杉並區高田寺町三二〇一九
 東京都練馬區岡田町二六〇四
 熊本縣飽田郡大江村五九七
 群馬縣立前橋工業高等學校（前橋市若林町）

宮阿島樺石瀨杉政小浪山丸若小三國是香璃武梅小荒渡農稻坂岸長野虎森三屋中松益林南
入角由山豪沢崎野島辺口山林畑村野金日由井崎林木辺森藤口本沢原入沢沢村野淵柳
治三幹敏隆義通芳着好子宏八隊正英正武健陸隆壽太四喜順正敏徳輝誠英
男天郎男夫天朗夫三重雄男一裕郎也堀一男登道志栄一一次郎郎登雄美眞男男勇彦正雄英

五五五五四四四三三二前〇〇九九八九九七八六四六四二

角志太太古根大酒濁申齋小吉竹肉瀝小赤
田賀池石平澤木井淺島藤山野溪山部常津
勝唯庄定源文和相利祿備光辰
郎寛恒雄勝健雄美雄塩監光一郎雄整雄男

〇〇〇九八九八七七六六四四三三一

片倉工業株式會社 鹿兒島市山下町二一九
 高知市二番町十四
 農林省鹿兒島植物園事務所 鹿兒島市山下町二一九
 栃木縣小山町稻葉郷一五七
 三光養老株式會社秋平工場 埼玉縣上野七
 神戶市東區本山下町九
 南久太郎南村木村南村中學校
 鐵道株式會社甲佐工場 熊本縣上益城郡甲佐町
 兼松羊毛工業株式會社 熊本縣上益城郡北星郡殿前町 四五五
 羽井藤藏藥房藥局同業會社總田藥業工場 福岡縣丹生郡總田村三崎
 羽井藤藏藥房高等學校 熊本縣上益城郡 五六一
 自宅 長野市大字栗田 五六一
 長崎縣縣廳定所 長崎縣豐前市栗田町 住 長崎市中淵町三丁目二七六
 本藩に死亡とあるのは誤りで左の如く留置された。
 絹紡工業會 東京都中央区日本橋本町一ノ一 富士ビル
 広島縣縣廳定所 広島縣広島市都府中町
 更級郡西寺崎中學校 住 廣川郡松代町組田四三二
 長野縣圖書館 住 長野市上城町一五一五
 死亡
 片倉工業大官製藥所 埼玉縣大宮市
 日本絹人絹織物工業會 住 東京都世田谷區成城町五七五
 長野縣縣廳事務所
 日本レリオン綜合研究所附 課 京都府公田郡手治町
 三光養老株式會社 高崎市飯塚町
 信州大學醫學部附屬病院 戸冢内科教室 住 松本市大柳町十一 平林方
 群馬養老協同株式會社 群馬縣群馬郡村田町
 昭榮製藥株式會社工場 上野市須賀町
 矢崎田子男と改姓 群馬養老中中之條工場 群馬縣吾妻郡中之條町
 住 長野市市田
 神樂生糸總經研究所 京都府阿蘇郡鞍部町
 近江高等學校 彦根市金龜一
 片倉工業大官製藥所 埼玉縣大宮市
 長野縣廳
 小縣郡大門村大門中學校 住 小縣郡丸戸町
 神戶市東區本山下町岡本栄藏十三
 日本レリオン株式會社
 鐵道甲佐工場 熊本縣上益城郡甲佐町
 農林省養老局

増城工業株式會社（横浜市中央区北仲通り生糸検査所ビル内）
通運産業株式會社（東京都中央区日本橋區錦町一丁目）
京都店（横浜市中央区北仲通り横浜生糸検査所内）
茨島郡出水郡出水町
津山市立東中學校（岡山縣津山市川崎）
福岡市箱崎町原田（四〇三）
片倉工業株式會社（熊本市田崎町二四〇）
本学園生糸検査所
長府紡績株式會社（長野市横濱字中腰一六）
協和紡績株式會社（福岡市南區）
豐林省糸糸試験場（長野縣岡谷市）
次郎會社（長野市）
通運産業株式會社（熊本市中央区北仲通り横浜生糸検査所内）
上野那美村中縣
自營（小諸町）
日本棉製油脂工業株式會社（熊本市南區江町一八二）
日本棉製油脂工業株式會社（熊本市南區江町一八二）
（主）東洋製油株式會社東京本社（一四一）

原名会社（須科郡松代町）
 白鷺（長野縣北安曇郡大門上仰町）
 郡是製糸会市工場（出雲市坂田町）
 長野縣勸業定所小請支所（北佐久郡小諸町）
 兼松株式會社橫濱本社
 帝國製糸株式會社（横濱市中區北仲通四）
 麒麟生糸株式會社相生支店（桐生市水本町）
 麒麟生糸株式會社神戶支店（神戸市生田區北長級通五丁目十九ノ一〇）
 兼松株式會社本社
 大和織機株式會社本社退社
 昭榮株式會社小倉工場（栃木縣下都賀郡小山町桶栗郷一、〇〇二番地）
 三光系高崎工場（高崎市坂波町）
 等原製糸有限會社（福島縣會津郡磐前山町）
 友水製糸株式會社（群馬縣前橋市）
 都是製糸長井工場（山形縣西田河郡長井町）
 新瀉縣養蠶聯合組合（新潟縣北魚沼郡小出町）
 須藤縣養蠶株式會社本部工場（川崎市）
 長野縣實業試驗場於本社支店（公共本市品川町）現在情大組織學部製糸研究究（出張品川）
 片倉工業大學研究所（埼玉縣大宮市）
 北佐久郡立根中學校（北佐久郡立根村）
 橫濱生糸株式會社（横濱市中區北仲通五ノ五七橫濱生糸檢定所一階）
 須藤製糸株式會社松原工場（升河市松原町）
 東村小学校（小縣郡東内町）
 龜山製糸株式會社（三重縣鈴鹿郡龜山町）
 第一生命保險相互會社（住 横濱市南区大岡山下町一、三三一）
 瑞王麻全保則七時信用組合（住 横濱市南区大岡山下町一、三三一）
 北松羊毛工業株式會社
 協和紡績株式會社（長野市鶴賀字中腰二六）
 福井紡績株式會社 退社
 福井縣織機
 伊藤忠商事株式會社橫濱支店分室（横濱市中區北仲通九ノ五七七大阪中央檢査所（大阪市西区江戸堀通四ノ三）
 大阪中央檢査所（横濱市中區北仲通の横濱生糸檢査所內）
 原合名會社（横濱市中區北仲通の新參町（住 上田市鷹匠町 上田製方松原高等學校（上田市新參町（住 上田市鷹匠町 上田製方
 野城織造高等學校（野城郡條ノ井町（住 埴科郡松代町
 日本無鐵上田支店（上田市松尾町）
 上田財政事務所（上田市新町）
 株式會社明盛會社東京出張所（東京都中央区日本橋區服藏大和ビル內）
 パルコ製襪株式會社（住 東京都世田谷區上馬場一ノ七三六）
 本學部機械化學科第三學年修入
 東城中學校（住 東京都文京区本鄉駒込千駄町一七三 北口より左
 日本紡績株式會社天龍工場（下伊那郡別府町 剪剪節節は備前にてき直正なる
 松屋高等學校（上田市新参町）
 松屋高等學校（上田市新参町）
 日本化學纖維協會中央檢査所（大阪市西区江戸堀通四ノ三）
 松本産業株式會社工場北足立郡關戸町上落合六〇三（住 同市内
 岩手縣工業指導所被絹部（盛岡市新山小路六〇）
 日本染帛株式會社（東京都中央区日本橋小網町）
 富士紡績株式會社主市工場（愛媛縣川奈郡宇佐川町）
 郡是製糸株式會社松原工場（尼崎市坂田町）
 株式會社生物化學研究所 退社
 東洋レイヨン株式會社愛媛工場（愛媛縣松前町）

資金募集

大窪照太郎先生
小林 潛丸先生
両先生は事同學校開設以來今春開校に到る迄四十年間始終一貫母校の為に盡精せられました。
聊か謝意の意を表し記念資金を義舉致し度いと思ひます。
御賛成願ひ上げます。

編集後記

△大變遅れましたが、会報四三号をお送りします。この三月は昔々同窓にとつて忘れ難い母校の開校式がありましたので、本号はこれを中心として編集しました。

病虫害圖譜
一・二・三輯

大阪府立農藝高校教諭西沢良一著

大阪博物学会 推薦

大阪教職員組合

府立高校生物教育研究会

病虫害圖譜 一・二・三輯

定價 一、一〇〇圓

著者は本校養蚕科二一回の卒業。本書はG・H・Q
農業教育課長カルバートソン博士の推賞によりG・
H・Qにも納品された好著です。購入御希望の方は、
大阪府南河内郡黒山村府立農藝高校内西沢氏まで御
連絡下さい。

伊藤學部部長 井上前校長先生を初め、ちようと春の学会シーズンで御多忙の先生方を煩わして玉稿をいたさきました。誌上をかきりて厚くお礼申し上げます。

△本身には久々で支部便りが掲載されました。いつも事務的な記事が多過ぎると云われますが、会報の内容を豊富且つ新鮮なものたらしめる為にも、会員諸兄の活潑な御投稿を歓迎いたします。

(中原記)

編集部長	田口亮平
編集委員	
松尾卓見	田中一行
桜井善雄	池田忠実
中原武	